



貴
14
3163
35(4)



海陸貝拾足雜錄下

大堀綱光に書けられた

此一稿は多の事すりんと空時あひ友人
ともよ重篤院方杜する。また近て是りを承
て至るてふきみる序よりはくまくまくまくまく
かせ其後年日とて又のりげきにく調序
修業のうつてお詫ゆへかく続いた
行り一ふくしては語ふすをれも及古どもア
カヌミテたゞひ傳しをもをれとあひて
人をえをもとしけまハ文字の間も消えせて
おもとがを跡を残さむとゆく
ゆす印紙ハ珍し復元ゆく所の事

さくがはすかのうまよめをほりゆせ
あらは厚のむらにあたて、ニモひりく玉もひゆたま
益井氏より附の画や、そばよ草よとくおこ
せうへつああああるほどとまえひんくてせゆ
おおきを又のほをよきれどおおへ又よ
きよめあくととむりや。とく

すく乃ちまかわを解く。あきハサキのうきあもしれす
人へあすこつひく酒のくへてつづくと
うそ序の刀掛よかられをつぶれてうそとをねり

あやのまじくとおへしも、うきをすまえすりけま
せ晋う海まやあちよとまがすくお歌うまは

いふるああよゑ

がまぞせくきく蘆くもあたてうむほまくもけりひと
あく人のほくまめあは
或一のきはきうすありうく進めハすむれくはアマツ
家のみのうよ文やす

たまかをすむきをありとけ都のあひのすくほるる
那太とくら便あひせ日よ俄くねみげがう
アマツのひやみせむれをくつみは使ましま
くはくはあくまくはくはくはくはくはくはくはく
えくまくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
わくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
はくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

五
五
五
五

おひめのまつりの娘おひめのまつりの娘おひめのまつりの娘

桂宮の御好とも大井の花ア待キニ事にかの
ノリ花香酒、うわあく、也駒、待シ云附体
あくもえ、ももえと、也自らもえ

卷之三

本邦の花の種類を自家と作る花栽培法

卷之三

かくのひまがくもんをやめか
おひるの自立はなづかさむもん見
たる圖と正義、画きもおとすよいか(一)
てもとみゆきとおもひてうら

三

我弟もいそゞぎて大井川へおちやるといひやん

尾崎氏の苏被あれ休乃まひみ乃文よせりえ

ましむよつゝ河、原より廻るよ竹の一柳
吉氏の考収寫りは、ふるま諺画なり。右前之云
ちどり門やえられ本あひけくすりさやうれいとおもひ

白從乃贊

多事にて思ひかわく おもむかに ほきはるかに
天降ふが、まのをすりやまく たゞ心ちきりと
おもひあひれんりゆう おもひあらん人へ ほく
月もてつはくす おもむかに迎むたまく まの

如東藏後之五百餘年廣宣流布

いふうほの御法のゆゑにまやれたりわすやま

三車

ササギ木みつハひづらが花車 ちりりりの匂ひけり
法事寺一聖二皇院節の古材を割る短尺板
ひきがや留めと川をせよとくのすらを繋げれをもん
興福寺の焼残りの古材を作りも複数を書
あやめ煙草すかし あははははははははははははは
義士小野寺重内の観衣手と号に憐る形
世要林鶴すり

武志あさのねのべのれうきとハ木のりへしとよす
みよしむれ垂松木梅あるにかづくせよ用
枝をつよつよとおんざとてよひ

月二

森はさく竹はちじろの陰すみよをき人のたうむらぐく
折りけむるひはまづね木の事ア盤のうぐく時すくふるき

大きな雪すねあり

侍後鞠浦中村氏の事

中印應雅老人妙喜彦まことと水盤二基

成ゆく文ア又喜彦と造りて序あくよすり
其一と鷹峯と号すと西山法師とすに
ゆくすくわづけるはへかのちのたむじもつ
はまづまづくもくふくらむ年を度ゆき
じくとあれてゐるわくとくとおりりりや
経はづく

乃世仰慕之小
子

あつへ干さむらも魚とひのこ

おまえの馬の駒をも
おまえの馬の駒をも
おまえの馬の駒をも

御内侍の爲や、ほん様とち

秋をはぶきのうこく
冠はば紫杉林より被るまほや

海童みくちの思ふけすやハ、才一のやうに相
松より雪浪もあ

松子嘗復來

まよは消えむれむうかすもとく
写生の如
手がいはせよとくわがりや年おきの間も
神原氏一とゆきを画やすやくも

写生の絵

まことにあらアおあたへ是れとおもねりさん

家と争ひうそ
とよし

まゆふ二人 牧馬よせ

下弦乃日
うきは雲のつらゝ
不

立
ひきだす事の如きは
筆の如きをもつて
さうまことにあらわす
と

おち難き事か
春波のよしと
鷺
萬葉抄

モロコシの事と申す。モロコシの事と申す。モロコシの事と申す。

ちくまもとみゆきり枝あり

高き山にあはまつて、たるの原の木をとよみすの原

瑞氣ももうひる盡

お月魂をもさうぬせりお武主のまことわんやまちく

轡馬乃そ

まかとあまやむちのあひゆうよまきかがわ神社

塔子もえすてお鐘也

天代ハシタヒシキサモアハ 草原の太刀内風も草也

あらま

梅の花もとまきへばはにこめ代もとせん

因相のすま樹もとせん

今まくまくう枝ちねむるさすりと音もと傳もくれ

又因れの手にあ葉

えすれやくまゆらまゆらり學りやくも節かりけり

壬生菜 稲宿薺のす

もちもみかきまのまをとくす雪れもとよめくれ

水そりまくあらまく

森のうらはすくらり御おと野まく耳にめ地

月うらまくちるアひづり

只ひづりとめづりとめづりはめづり静もととすし

鶴がくとあまくとくのよわく

さくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

知章載馬

多喜のよのうとくとくとくとくとくとくとくとく

いささきすとくとくとくとくとくとくとくとく

まともや芳艶の奥にさ已う聞 ふふハ如の娘
きこてさくらもあはる多羅又せくももり
本の歌とむくおひつに重ひづか
それへあの人をくわづうがみめじくらのく
をゆゑよより入へてもゆでやま

うそく大うもあひくつづく
うやま 巴、ちくもひうハ再びせまめくらさん

小まち

その頃、海のひまねがよもとやみひのゆれよこまよ
あやの索?

えいとうかめちくぬわくやのこえままくらこる
室也堂師忍

かうひきとわくわうかうふせくうかあんみハきがまく

藍江ク画 烏のうよ野とりすく波

はう紫方意ぢりてくら波のありまことあやれ物のもろも

岩ユ松ガリア繁ホトニテモアリ

みくらむ砂鳴の三面を一これ田中せりハ乞はる

猿ひづり松把の松よついをあらざる

山猿のあらまやうはむかひきゆ

大まち猿内舟

うそくぬ事もなまくさうどやハちくとまく

鴨くらもく

あわくハ見もなまくすうまうのとれき

小町

ううそせうすのひきよ水をもぬけのいろをこす
根引ねぢり

いのん人のひよひれんをやすくひまへあひる
二股大根扇げほくわ神事みづんとく
持うけひよひくすのばくわねうきくわくわく
般阿佐野西行の像をおく堂の板子押

科ス

替りにあくわんねうちあまおうまくはけくわ
ほテのうえ様やあり様すくわ山つる
うちめ書のたよよまみぞく方を齋すもの多す

第士

キツニモモモモモモモモモモモモモモモモ

ちひひひひひひひひひひひひひひひひひひ
手手手手手手手手手手手手手手手手手手手手

又下よ月彦あり

日かみすの秋みくら花形よひみやきみや

又下よ月彦

かのくとゆく白帆ハアのやまくとゆくとゆく

芦又みくら

かのうかのかつやもむくや芦がむくよとむくん

かくら

乾坤乃葉のうちう形叶ノ用一高まるよせけり

山上怪鳥七種の

ね鳥ハニカヌアヌアヌアヌアヌアヌアヌアヌ

セタセ種を使

あきくわゆるをあみ天の川原のせまば

波

おさなみあらめほとほよもよ

室小治の上よも

きれりのむかひをもとすとまほひとも

仲はあらにむくとあくが

あくわいくよへんとくらうのゆう室のかねの

老ふうてよすらやのせ

えううすゆううの道ももとむら詔ものこまき毛

古つうあら女月の下よも

てううのゆううを構のあくひまやねうかわん

あ者人

里のれきあはくわ天ののほけやうやあはまくわ

あやう仲園

秋のくわくのうの部もくはやあくわくする草くわ

吉野靜

あくわくおうくらわ一まくわあきうわ神のうわ

セヌのくわくわ

あくわくおうくらわ一まくわあきうわ神のうわ

松二丸

あくわくおうくらわ一まくわあきうわ神のうわ

梅鶯

花うあくわくうくわくわうはまハまうとめ何うばせん

秋のくよか夜のまよひをそぞり

ほくよくすむよへかはり衣袂のじゆうりあうばかり

海上獨歩歌

まかみのまおつてよもれをせよしゆうき度

万葉十一枚也

山のれきとめくらわ小松や

まくのね

ぬくめくはあつてかく本のくわゆゆ

梅柳渡江春の風

やうすれひとくわく柳不えうやかまう水のく

月のよよ鶴と花あり

まくはねねとも月のくわくやまとくわくや

老いの衣わ木葉も

のうれき残るあむくにちるハ柳のまくわうけ理
度きゆく草もく一枝のくわうとく月あり
野すくわれ

行歌のねやくらとく風にて音がたくする月也

水月

ちよくよのうりれあれのじのくもみくわを
かのくもあてふる自歌入てくわうとくぬまくわ

羅陵王

まくはく歌のまおもよをくわくくまくわくく

音はくお月也

えよかのくもばくかくまくまくわく歌にくわく

月乃前よりより

身にあはせやけふ時よりかはまづ

舞を舞せり

とうとうちよどる礼若乃せはのまつを

鶴をうさ

あはれむけりとひんむり已う歌うわ

岩の上ヌ庵うす草乃紅葉うれり

石橋のあそびとある庵庵にてて書や萬人

せらふめ豆豆

まつわう後成く

まつわうせよまほみうの西のへ

九月九日葉菓袋うるふ

高たるばかりく今りてや升ゆるたのこ

蓬生入道驛馬御載修馬のまと知る

要あくゆかがくことねのこと自かげトはりき

生師乃行詔せよひ傳る支よ大よけ

きよひう御載乃如きハ財傳よしのせさ

きよひはさくにうたふをよしのせ

きよひのせよひ傳る様もおけせよしのせ

はくす

まつわう通く事く通く事くまつわう

競馬

おちひ
まくらの駄すをたますあひやけよのう

水原より
元花蓮ひづけ
とお人をかき

西
ア
リ
カ
ナ
シ
ア
メ
リ
カ

游
山
水
之
樂
也
其
間
有
良
田
美
池
桑
竹
之
屬
阡
陌
交通
雞
犬
相
聞
此
中
人
生
而
不
知
有
魏
晉
一
也

さもうかくもこせのりとや只かくへされんがゆきす

萬葉集

花事
花事
花事

丁
○
八
○
九
○
十
○
十一
○
十二
○

電の書

年々の事は、
おまかせをうながす
うなづかずの心

通月夜の事より

ひよこ上り 桃桜めぐら

おれの、この月
か月そんとよ

卷之三

大臣女めひの頭薬を塗てく様の枝とん
とて枝ひのうめよがけり

まにほくかいくかの家却て金もみやかなさん

墨画のさく

うきうきの夕のうきもまあとゆやくすこり

保とふに猪

ほくねく隠むれとくはあきつるうあ

喜波の香食は梅葉がるまと人のえぞでさくに

うしもれあらあまくらひまき梢くらぬ窓のあく

新秋うにゆみうれいの園

ひよみせんへとまことあらわせとくそゆやくすこり

山鳥うり葉をまわす

あらはまもとれと原まもれり日とひりはるん

うみすりヰ枕よまわ

あら花うめりもせつおつうて清きを歌を含せく

葉くも葉形をくふ

あら香然ひあらむかすやハおほれ秋も氣きり

え際う霧まよくふじく

あらのゆくもたうひみが世のゆきま

あれまむかくは思ひきてゆくもども

もとれとめかくまれることもありせよ

自とつてのうれしきれきりめめは

ゆれぬ天、地の幸ひもとえ謹めいと

うりげむと父既列ゆおよのかま勝

蓋作さんとく画すやうかと好やれこれと心をと
そむくえ燈明よゆつたまむきくきの
聲よますまことせくせく遠よひき、うらと
へくまきくと十の筆寫に作る用ひとれどは
がもくとくと御のくらうさればまの下繪
乃殺りひんをあくと難よ物多く抑ひ
てんまいもくせうぐくとあくよするを
たまねのおや子うるよはにさーとまつはとみる
紀の國うち出でるゆきり見秀倉跡と病く
まちくわらは廢よめりてせ玉傳とうゆくすく
お行く作習ひ文稿

祚セのソヨの後うやれハ蓋おおつうもつてうる

佛中園とみの油惠の池のことをクモと傳ふと
まほ人のうとみ

涉々惠の油もうとくはいと代へた鏡るゝま
柿幸乃神像板百軒とひ傳はりのハかのゆ
故の道よ志深うりには往古めやーらよ祈り
て年へて木板の流本をせきあひて像を作
奉りる龕をまはすゑおきやうにと人よひす
へうちとめん藤野氏おいつきほくわるも其一
筆アとも、其道よ事何んは更くあれが爲め
おおすりにもことれきとあくらへほ前ま
体へまくきくはゆくとし集めゆにまよ
うほり作り

春のすみとすみを守りの神風はるかめに吹きゆ
金体の板姿の形を作り見る鏡の前

身とすみれ板姿あしらてまやむとれまえ

おの福ちよみの豆う

小松のいの

ばくのきよひあよかすれはかうせめの事代

扇スのんのう

明くとも見えづれりまむけニアのうとゆゑ

ね一枚

一えにてこすりとせのかげをえて柳邊よりもれ

葉せん賣えのう

よやれひよりぬえのうをひはくとせしむ

猿の子やもなが

せうて人よすよすはれますきたうと待つまん

巖ヌ薔

いほうちゆとみれハきれどうもくみゆまよふ

万葉歌あり

かくもえうあみれりけんせのきゆきわらみ

大原ほ幸の

おやえく畫さう

山桜まくらむれきてほのむきよとせけあう

あいの郡のハキの桜

るやとまへ室ねげよまきうれハキルヘトサシム

帰日を報す

えふおもてすよしゆめかわむすを玉とおとこえす

玉川衣す

あれくすれりすみの山にうは多めきりあつる

またくめれすや

うひのつりとまれる山をなされをすよくまくは

葉乃花枝より

むくがり咲きのむらうがまくとくわうとがま山

ほ月すけ

きどゆよせ空にまくらんやとれくこする月

月の伴にて

えふおもてハやもゆりけり風のあつくやせよしん

大は画 萩娘 萩娘 まきの月代 がまえさま
さくまくは是とくゆう後をつたはのまかくいづねと

ゆうにひれてつてはつへの心れきくとくろくと

トロウ

まくらくのくとくの禮とお詫びあ代ひたとけりれ
自業まくら鍋物る

はのすとくがくはすとくへけくふきよまきのうと
巣のよおせをり下よ床とくら寝すほくとく

あんの南よすす河 晴のうのうすとくとくはせれ

椿一枚

ハム代生のうもはまぬをちとやうをの様されきりけん

尉と波のこく

かきりてゆきとすれとあがのすの歌ハあくはげき
ゑかくニサスセイわきわくめ代き考くひよむけい

免まくせうづくふ

えふよ月の袖の袖もゆのきくまきみすうれ

水々飄流すまわ

萩原人のうらにうそいふすれもみとくあくめさうり

宝珠

何事もうるまつねふだくとて思はずれもと名づけん

柳の月夜のまよ

興のあよびひくるまゆハ終とうふぬつうう樂

散樂志松

アラシの音をちせときの秋のまなみり方ばかりあきうれ

又のかさん

み草れやうこすもかうのは只かりまなみをまほりうり
夏とみくまみせきうるやめんれまえのうりきくまき

篇みう縦横を書

万代の秋のうれしの季、まく人のかせもやうるあくせ

おきりき處れつむとおまとあん萬ばうくしけ記

王賜君

天取ひむのせ後まづくりんひきハまくせまくせんりう

山寺

月をかくすくあはれ　山よどびはまほむす

あら

えうみりの船かくすく朝ひにむれそよんとよくさん
仲よぬありあも帆をむくこし乃孤弓
松の木まぐれ遙る波方よ静寂のよ白い
さうかく

松風かくすくあらきは波の上と新けかりされ
浦宿の見事を待半をかけ船まづく

ゆりくわ

おのつぎの舟ともしはむきふ波のすく捨まりのを

ゆく河骨

あれよ、お廻船と呼ぶのかおりとてあら花のいろい

うめやすね櫻やり

桜とみよとけりはくのむのむすうさうり
春とか松とよふ

今まちのひやとそぐれかねのむくと春の風

駒のうすくわく馬のまくらひせのう

まへりえええかくわく馬のまくらひせのう

大原め薪にむかひて菊の花持て

轍走人情を麻葉

久きやかくまみちをま共はせうきりのまくらひく
よめうらうみもてまの皮をまくるあらとめ

そとあたる用事たてまくら

だまねのはまよひとせはまうこむきとあまうせ

筆がくべ書きする

山筆人シヤンビツジンがつまれて、いまかわせある
うちけり。わざくのち筆をうりたれ、

今筆事ひぬかがれをたゞをほるもうち筆

ある人ひらひえくふあゆう

行すもひるもめぐらして、まよひとせはまうせ

山宿人サンスルジンと寄て、茶葉のくさに

疋ハタケもひまひまむかわ草ハタケの葉ハタケの河ハタケ

ゆれ山よ音ヨウム風カキコを嘗シテる

夜をれり、野道ノドウの音ヨウムのけりは、宿スルたもの

桔梗キキョウをみつへれもがくがく立タチる

ほおれ写シテすとまわゆの、はうまとぬけはれ

秋アキのわるや風カキコすく、まうじと強カタの月ヅキ

花ハナはれり、やせんぬの、ほめはあくらり

夏アキのあ男アキノコか酒サケのむく

きみの、人の心ハよ村シロをあたぬか、えきがくげお

わの花ハナのあとに白シロき免シロき

もみうよううりそり、静シタむすをれくあり、よけよシタく

まのかば、の船遊ボウスて、萬歳靈マニセリ、あはば、らと

そめあめひあひる、すよ二王ニウエイのひり立タチたる

よかわらきの、くらまくらまく時ハ、かと守シテりて、あくまく

あきらめアキラメすなが

ひまくわか、いき、圓カクをあひく、とくらすもあひまく

桜の枝もやうまつ

さく花先づちにうづけうちひやまき色どり

柳よすめ

月くらむとおなじくまくわ柳を竹よすみ在る

扇よ蝶

扇よ蝶もすまつて扇蝶はうす花とまくがん

朝日乃下に元日手引るて白き花行

いともかがやにゆり

美代の草むひりて月ひばははへよたる相そくと

空あくと也是庵う虎の

うよそ風も水こまぬとまくハひきまくおのひまく

七夕天漢えくまく

て河さくふみ六不え神とまくうそくわれをかく

ありゆめうなづふ

天ノ原人多生とはれうしのせれ種みづれ年年

桃の花豊ま

今ふれまく水ハやまくまくうかはげやおきより

湯の取り形模まゆま生月見るえ

移えはまくふみとむきハ月ものみれおまく原

ほてへ持二月四

大氣きよすまくわめくは月とくまきう

帆あく

もまづのすまくは波とぞつは立まれき帆けり

橋のえくもまく

風也以御へん獨花人のきうたる故より堅
まにかむ

いはうとすよ遊のうちれはまの葉葉あらひまもん
拂えゆふね魚二重へまに雀をもん
鶴鳥れひきちくはせさんちよくとすまはくも

しゆよせす梅

むれのとくにまをる梅のそれをすみ代やてん
槿花よりうづくまきりくわ

船歌のもよ常盤よりうづみかけすれんもばれ
梅又早そり

梅えよまゆるうきいとれを待つまんちよまく
寺の事に月をもと席をり

かむきく月をくくまくまくはまくまく

紅梅に白梅のけくくく

かくおもすくとくやめのむくわ枝と先をれ

あくみくらるく

かほりうらひつゝをまの名と誰うあさみとく

ゑひも鞠つてゆふ

大かきはサシキヒツヤクまゆうせんがまくの神

白椿

一枝れどもまきもとはんむせ乃やあやハレあせ

樂焼梅拔葉碗の

うきよせこののよし風葉れぬよ竹す梅くさす

ほ新竹の造了元の徳ま人多くかや達

出する秋に

人これ作りてはあひのとどもちうてやえをみすん
伊鳴山西の黒竹はくをとすすみ檜の
紅葉のうすがれをとめくらむれあす。せん
さかを画くせくすらけよ

絶景すまほを残すくとくう秋をゆく行の見き

春よりくすむ桜一花

すまもつる代のつるをませぬみだり花すくけり
さく楓一枚

一葉とくよくいまとあさりぬすもすくけり

ほく風

いはうすくとくよんはくすむれとくとくとくのせ

ちうあすニ

引すれやまくすくのひ花くすむと何里のん

人へ画きけるよ津田某つやうてよとむ

くとくとくとく

得きれ度のくすくれきくとおのる聲みや居

薩摩國中某うヰ筈みよとく

今は却どすくちこのがく國原の烟一々く目に居ひ年
ス景えてうりたるぬすれきはせ良義の里くらざれ
ヰのあはあきて飲ん料みハ必河みそのみ汲み下とあ
ゑすくへすくうすくありぬほづき日とくまのとくみか
くあはひのねの村あよたらまう獨りゆくあるて司と
うあひのねとく行きあくに田中ヰうちま塔のや

さにせありせ水也すかくすよりて清く所ともとあ茶
乃湯にゆつてあす 深くゆく波をやを奪ひてすより
ゆくもとむきゆくやめく往をさんとたるにハみのうみ
きちりもつまへ行くるへされへ何うせせられ
あくとくばくもアナシよりまく人の行けりきり遠くい行へき
あゆは原の美井天のみすげれどもへ野中れば
ぬわらの水を坂の上になくとくとくひきとくの心を
あくちをれは山へ山へ大和のこととはまじふ
ゆにひけく流れく川もほりゆく水もとくさよる
がきくめくさんほ義ありてえと新はぐみありゆる
すてとくとくりはのうちあれふ宗のふよ道をほとく
下はの根のまくはこす

得えきはまほ水引は清きう中につまきよまとすむ
わやまにてこひるゆよ歸りさるをうゑすかくともひまて
小坂宗甫あさかち穂と号ひ一葉巻をこそせよけり牛
とアヒラアリ今ふれゆとかづくらはかの巣のたぐひよ
あて人をたゞけ物とぞすれひあてうゑへきくまと
あめわたまわよテチ、そこ金ふうからゆるうきりに
アツハアツアツアツアツアツアツアツアツアツ
名所はおも田中村戸山、阿波守みひねる多き難處也

誠拙和尚乃欲集跋

東のわがおふせをうけく故遠拵大徳のみぞく若千首
久さよそひ日ゆきをまの奉るゆゑは大徳ハシモセ
世よもすくすみえあるちかまくとりハシモ在焉居士

おはさんよハハテタタタタタタタタタタタタタタタタタタ
アリトキ教入キハヤツ用ウタキ方ナリナリモリモリモリ
モラクルムシムニシニシニシニシニシニシニシニシニシニ
ラシノスシナリトナリタタタタタタタタタタタタタタタ
生ウタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ
アリサシナリモルフヤトホヨキホモモモモモモモ
メガヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘ
老をヒシヤン人ハタタキホモモモモモモモモモモモ
ナツモモヤモヘモモモモ

ミクタキミクヒモモモモモモモモモモモモモモモ

和田萬紅帖ノ集ヨウヘ付

侍う書画を集めし帖と仰すとあくまへと多く其集め

たるさまとアレハヌクの高きアリタタタタタタタタ
キえきをモモモモモモモモモモモモモモモモ
キ境異國にまく及ひくとちこゆめり物ノメタモトヅ
アリテ好ケモアリユ多キをシカセテ更ニシムれ等の
アリサヌヘにつて興味モモヌと和田萬紅子
ヨのでは上のたうアリトドリハタタキ野ヨ生る甘菜
カア清ヌトモヌキヌ魂のアリルの本のみアリの
トキヒのたう追凡ナリアロアリヘキ尾を上田耕冲
画ニカタシキを帖これアリトカ昔農業六儀の成形圖
説農業六儀をアリテと墨色合乎に既ヌよめさ
のアリハアリサ味リをはりあるハヌモモモモモモモ
調(カム)トモ考ヘレハ妻カアレハ葉モモモモモモモ

うれたりまよせんと朱へして又先とちて
もむをみのとにハラヤーが一木ノセ販と云す
夫人ときれい言あれりやへるやス

丹羽三木氏著錢話序

そとあらゆくもよ人ありぬとぞいたのむすり
スル不よくやし、されば嘗れきよもねこ夫人と
サ一筋はれまの官のれど、その軍めりうと文字は
ききくさむて直ぐかわゆるもあれ、されとたのも
人や、や、後ハ石筋のたうひはあくと都よりまに
高き筆一き其名きこと、放をあはせど、うるむすに
もあすいくよのとぞとく書る人待する時まつす
まち一、伊一、モテ、せむと實と用

うれさんふハ好古乃輩の玩されよあくものこそあきま
く見三木ゆ一おほく、ハあれる錢話て、書とみにても
まち弄錢心かく、身は何うれ歎のこゑのも生と
かく、とへともひりく、せられ、ま功かくある志、
か算、ハ、うりまくせさんおのきむけよあかり、形と伏
見るも、うるやうはくとせんとくるが、と、和銅乃事
もとひりひりて、舟乃すれ、これ、文字のやうなれ
うと金色せうるけ、きと、アスル、せあむ、
う、鳥川の流の東、西、かよがち、もと、やうざま
うま心つまつ、今錢話をよはれ、和銅もと
うのにはあらうけ、され、あほされ、り、ねやう
年、うまひよもと、おまね、を取て、この

かみうへまわるもと

あ代くとせんく峰を川ちりと高きあれ詠や

石崎也ふ業す

右のけつ山なり支ある都之おりと國く高津の市
とあはれ登る及今これ起立ましととむも
事まよ／＼して何とふさんとて此橋よりたるる三
哉あといても事と入るいへくとすまを／＼黒
ほくあつけ食遠樓とす其處むら皆名めりや
乃多羅ハやく辯えまちれ山と波と連る又位のえおねのむ
トをせんそはのああさくがくろき川の場にのぬま
ひぐれまうんちるもえとえとちるがくれき絶勝ひく
拙き是と云ふんやつまのれんへろるにすれ

祐高に住るやとふと

保定の浦崎がありや古松あり傳へまふ古への都の森
乃高ありと又あくハよ殊東夷のや、れり、とばる
おあれ、いつくへうゆうやんかりよ鷺鶴樓と号げ
やされ、考乃支よひつとく能がくとく遊びる
くほんハ又よか

信野人貞起其國るる構乃名と雪アシ

兵原貞起ゆサ橋の壁に障るにすや詩や押、筑
ちしれ扇乃かくする志きくとつともにあふ調
度とも又これ用がくに造りまくられするがくうま
そく好すれひもうとやつよへもんまくハ高殿乃名よえ
かけまくりゆきりたりひくまくす已くもあくとれ

ちるにかんいとや唐かくすへ立明とひらんけめより
かくはもとまよはりの、あといともあくわれみえほひ
てねりまもやくわとまうわをうりゆく、りゆくはやぶ
かてかのがはなつきともうれやたはまつたふ方モ傳
うはよ清風明月のうりを描く、風月橋とぞうりよお
よせ心うれさんやうにまくすすりや

薩ラ人ほやう書画帖金裁聚芳乃序

山田清あぬれす裁をやきのどもかつけられと
すハ今ぐらは十をせはうむサ毋ミビシレやうつ
ひかひくもひつねもひくかく行のつまよたねく
ヨアスヒリムをせよやじむけきゆひおうしゆ
せまむるにははこうほちうん花れぢくまとま

あうふすくま、はくよき心れまくゆうんか
もやとまくもとまうちやまきえにとて山のおくせう
あそとまくもとまめいて森や落や何くれとうと
森のゆかうとゆかうとゆかうとゆかうとゆかう
やうとひせうとひせうとひせうとひせうとひせう
とひせうとひせうとひせうとひせうとひせうとひせう
遠きふる葉の秋のそれゆとがんかうりゆるすれゆ
たとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

秋の末トナリ一たる

難のまくううひうにやうきゆくもたるにあ
通思事情のあをとせんとをゆめほりにゆめとお

けりやそこ里たれきくまをちこちよへくまみれゆ
ひきのつみ縫のおゆするうにまじは日影のうき
く匂ひくふ氣とすかえん今ハ山道五うめりほ
またたちにかづんむゆくうんとおぬせゆに至
やすくハひくうに麻屋の残つてりとがてくにか
さあすきうい小とや戸うちげめて軒乃書の窓乃簾せし
心づくたるさまく庭と一めされとおのづく時への傳きて
華ひくうきぬせむえくこときおまかアニシムみはあたな
もとだに足とそともあくゆまくうまくねくとは
くれハゆきせきと音節にあくもこれとくと
いへばやくもいりてんすにあくもなる事ある事
あるゆねひきほのわくもたやる時あくと見ておき

合せくる御度とも皆へまへんうううううう
ハ寂室乃や一のうううも来おとにまよ山中よきと
よーもをもくちりける松岩根よきくはくうめく
先の坂のうりに入もたるを人のがくくーくもーいやーがみ
うトきれどもてめうもひとうとひきとおやるとて
世うき人のがくくよへきほりにあくはくうる真
にへくやくはとうううう今せ説うよ朱引ていてやえ
たまをもと紹締あくとくちくひく人に下るたま
まことにきくまじるきにまじはれあくはくうくふ
はくうきおくけんぬくちにも元をまぢうけとくへ
まよまよにけりおまじあくハ達めきくもやけくれ共
ううがよはひてハ何の道もまのれとくじひくあく

さまでやうをやくとたれをひみのうとつとも今が事
ハむんよおこれひりてとほすきゆるもひと傳するを
あそはうりせすにおこうやくく何かことなりとしきつけ
傳人宣ふとまつきと宣きと義と何やうとも皆あみ
えを傳うるはよゆで左行くはすのみにとどむへき行も
あらわれ心をうるんにハれうるの位す傳傳さん
せ乃うるはよへくはるをばとろへまるにもゑへくはるが
へ行くがれどく今ハレ行てかくはる傳ふうちれ
をかくめやあハ行くとみのうちば人來つさせひへされ
ハ乞うとまゐるおぼりてひきうにやまうがき行もばくは
おにせうりまゐるくすま引りされといふとひくはる

四

江戸の被傳の筋文

文政館の被傳一巻たちもむやとけきくきうぬま
はうれりやうりやうる波のうアヨハモツムムキは
やうくふ尋たく縄くりうーはるに石や見やひう
うれるは浦へのよすへきとまうハ必明玉の齋乃慶き
るへきすへされと後人の列よハ昔ノれの方も達
りかひくはつゝくもやくもほすに何えもさ
トおまくニ日三月うはいいつはすりとくす
とくれづけうちもまきうのもうちかーてるゆ

五

鳩野醫師後の席

源氏の國とハナリハセをかきかをのまう

とをかくとあき人の後よりにあすへて後の所生
のつゝまよ日向より支拂ひてくらはのまきめり
くる役の官ひれりけりや人のうへりてひくい
るやう生れ更大きさむらきはみがれをもとて
又せの向と云はれよ増々の大なるゆだりが一志と
おきまふをもと人づくらふとしわと業あ
あらむけるハ後又がよきんとくとくとくとく
えやくはまれあつてやむのえりとあ業只た
けりとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
枯葉すあり候也おめきハ其志のたゞくす業の
うれるハ文と呼よれひんよれりとくとくとくとく
は難波とく所とく芦がい乃翁ゆりゆくめくめく

にあひてられときこひまつる筆とへ門とくらうほ
とをすえたるまくゆくみきハ老もゆゑを近へ
るくまじめにあらひすりゆくとくとくとくとくとく
れすとととととととととととととととととととと
武鳥おきにまくふとせてとくとくとくとくとくとく
おありひづれとつりがねふと雅ひきとらやね
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

亨氏文掾

元亨君ハまよのゆふセトにせりまよへひく
やまくとくへよひくとくまよへひく

ちりんはすの文く何れのきつも度くつらひ
引く遠き仏くに乃文もまき傳へえり
かづく御めやこわのまほよ入まくせよとすよ
よきゆるひ大きひよち嗣るえ寂ゑよあらう
めあひくさう御くして先まちみひほむます
ゆえ良名をさくみづくは近きあすれひ
やくらふる川筋りて山の奥野のあく心とく
者とおじいちひふねよ船せりめりことせまそ
ほくほくおとしとく御月のちうらんおすり
ゆくふきさるあいの樂、すやすは
ゆくれよすきみひく、おとけハキよづくば
とよはくとひ心をめくまゆひけとハ画

教やうれう五方あるかはア、あんねは
一方に埋理く人れアセミヒカク、おけハ今更
言のめく御せんと山や林なる西念道場乃うちよ御せん
御はれゆめさる余りはあくられくうよ黒むらわ
そくまくう石畠あくあくひまみひけるややめ
ゆえゆえゆえくせまでぬまくわくも

福大明神影額裏書

此代氏が多新ハ東を洛南千本の東を教中堂寺材
多之乃墓所と以爲有あくうち補大明神と事く近村塞
多蓋神とあむ今之れの事とを告人御、稻荷乃社に
輦帛を形代んを有ー本像ハ本國寺は塔
中宮持院より事鳩香川先生形工め水よ

かの像をうちへおきあそぶ水うちが像ハ紀氏役
後御所へ送りトテ考へ多々有りて少りまし
古作也トシテ三紀氏ハ天祐九年十月九日、十五歳
位四位と下乃の位をすて、卒去せられたりと定むる
す所後漢詳あり今まよ室をうちぬよさむと先づ
ウノ歌さまよへ四十ちぢ五十ちぢとあらんとは
かれ古今撰定乃はおののみおもしげともほよおまよ
つゝやあゝ井

琵琶大曲の傳へば

直
晋
王
羲
之
書
東
方
朔
賦
卷
之
一
其
文
采
筆
氣
勢
雄
渾
不
羈
絆
其
字
體
勢
變
通
縱
橫
之
間
無
不
妙
絕
人
間

物の風の音もよむ來りハシル
お君の音もまたアシテ有る者アリ
まことにあれどアシテ有る者アリ
まことに

家事はまことに
草木をば植えよ
月もあらん

三井家ノ二ノ精也教育あつて萬人孫
名前はおのづかとひやくとおとを治多森
乃多大輝義、おととおととおとと
18年乙酉

精一　人よりあそひつをとてさへ
あまのうらわせきる巻をのりうちて
ひくはすまめもゆよはくはゆね
鳴くれりひくはゆもくはゆか
とくがくゆ頭をもくはゆ
さみゆくもくはゆ

左後國沖半紀望人義之

持主
藏

